

一年間

福間 聡

(元コミュニティ政策学科 助教)

一年間（2013年度）という短い間だけでしたがコミュニティ福祉学部で教育と研究に従事した時間は私にとって大変貴重な経験となっています。

振り返りますと、2012年にコミュニティ福祉学部での公共哲学の助教の公募に書類を提出したときは——簡単に説明しますと、大学の教員採用は、大学のHP上と大学教員専用求人情報サイト（JREC-IN）に教員公募のお知らせが掲載されるため、自分の専門と一致した公募先に、そこで提示されているフォームに従った書類を提出し、書類審査が通過すれば面接にまで呼ばれ、そこでの模擬授業等による選考を経て、採用不採用が決まるという形式になっています——前職の4年半の雇用期間が終了していたときで、安定した勤務の職に就いておらず、いくつかの大学で非常勤講師を掛け持ちしながら、ハローワークに通い失業手当を受給しているという状況にありました。その年の3月に娘が生まれたばかりで、これらからどのように家族三人で生活していこうかと多少途方に暮れていました。前職についていた間も何度か、他大学の教員公募の面接にまでは呼ばれていたのですが、うまくゆかず、運良く呼ばれた今回の立教の面接は大丈夫かと不安に感じていました。採用内定の連絡を受けたときは、これで少なくとも5年間は暮らしてゆけると安堵したことを覚えています。採用されるまでの間、雇用保険や子ども手当（児童手当）、保育園、子ども医療費助成制度といった社会保障・福祉システムの重要性を肌身で感じました。私は現在、高崎経済大学地域政策学部の准教授に就いていますが、コミュニティ福祉学部での職歴が大きな要因になったことは確かです。

コミ福での教育は、担当コマ数が少なかったこともあり、一つ一つの講義に集中して取り組むことができました。ゼミではコミュニティにおける社会正義や倫理にまつわる様々な問題を考察し、FSにおいてはディベートとプレゼンテーション、コミスタにおいては課題テキストの担当者によるレジюмеに基づいた議論という形で行いました。ディベートという形式で半ば強制的に発言する機会をもうけると、自分の見解を示してくれるのですが、自由討論になると私の方から発言を促さないと自分の考えを述べないという学生の気質に幾分もどかしさを感じました。テキストの読解力やレジюмеの作成能力は優れているのに、発言することに躊躇することは大変勿体なく思いました。提出

されたゼミ論文を読みますと、各人深く物事を考えていることが分かり、学生の発言を引き出す私の能力不足も実感された次第です。今年度も兼任講師としてコミスタを担当していますが、発言が活発にできるゼミ環境作りに努めています。

研究に関しては、リサーチ・イニシアティブセンターのスタッフの方々の手厚いサポートのおかげで今年度から科研費（「働くことの意味と所得保障政策との規範的な関連性の検討」基盤研究C）を獲得することができました。また坂田教授監修の下、3月に出版された『コミュニティ政策学入門』（誠信書房）の中の一つの章（第二章「社会正義とコミュニティ政策」）を執筆する機会が与えられたことも有り難いことでした。今年の9月に2冊目の単著（『格差の時代』の労働論』現代書館）を出版することができましたが、一年間コミ福で先生方や学生の皆さんと共に過ごした経験がこの著書を執筆する大きな原動力となりました。

立教の、とりわけコミ福の学生の特徴は「優しさと明るさ」にあると思います。以前よりも将来を見通すことが困難な日本や世界の情勢ですが、皆さんが持っているこの徳性は周りの人びとに力を与え、コミュニティのソーシャル・キャピタルを高めるうる希有な能力です。私も講義やゼミを通じて皆さんのこの能力にずいぶん助けられています。こうした人と人との間柄（コミュニティ）をより良くしてゆくことができる皆さんの能力は、今後の社会において最も必要とされる能力の一つです。これから色々な困難に直面することが必ずあると思いますが、この徳性を失わずにいれば、乗り越えることができると私は信じています。また私も今後の教育・研究活動に励んでゆきたいと思います。

最後になりますが、リベラルな校風の立教大学で教鞭を執ることができて本当に幸運でした。一年間ありがとうございました。